
キジトラ探偵『琥閻』 夏バテにはご用心！

聖華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キジトラ探偵『琥閻』 夏バテにはご用心！

【Nコード】

N6105N

【作者名】

聖華

【あらすじ】

猛暑が続く、夏の日。行き倒れた主人公は、何から何まで変わったキジトラ猫に出会うのであった。

『言の葉の森』夏休み企画小説です。

どこからか蝉の声が鳴り響き、真上に登った太陽は問答無用に熱を投げかけてくる。なんとか光から逃れたいものだが、このコンクリートの道には男一人が涼める程大きな影はなく。恨めしげに見上げた空は嫌になつてくる程、真っ青に澄み渡っていた。これでは雲が日差しを和らげるよりも、蒸し暑い風が吹くことを願っていた方がよさそうだ。

しかし、暑い。どうしようもなく、暑い。噴きだす汗で服や髪は肌に張りつき、喉が渴いた時特有の違和感もただ鬱陶しいだけに思えてきた。あと、もう少しなのだ。もう少しで目的地である市立図書館には着くというのに　一際強い目眩を感じたと思った瞬間、俺の体は鉄板か如く熱せられたコンクリートにうつ伏せで横たわっていた。昼時のせいか、それとも俺に運がないのか、近くに人の気配はない。なんとか立ち上がろうと努力はしてみるものも、重い疲労感にのしかかられた体は動いてくれそうにはなかった。倒れる時に咄嗟に前に出した手が、痛い。

やはり、体調が万全でないのに真昼間から外出するのは無謀だったようだ。急がば回れとはよく言ったものである。このままで数時間か経てば、俺は熱中症か何かしらで死ぬかもしれない。だが、こんなことを考えるのは思考能力が低下しきっているせいかもしれないが、その方がまだマシな気もする。少なくとも得体の知れない何かに取り殺されるよりは、楽に逝けそうじゃないか

「おいおい、その兄ちゃんや。夢を抱いて全力で少年漫画してていい年頃だつーのに、若くして死んじゃうことに納得しきつちまつてどうすんだよ。人生はgoodよりもbetter、さらに上行ってbest、まだまだ行くぜmost、これで終わりだmore and more　ってこれは根本的な意味が違ってたんか

目を開いた俺の視界に飛び込んできたのは、青々と茂った葉と先程と変わらない青い空だった。背中には硬くて平らなものが当たってる感触があり、蝉の声は相も変わらずというよりかは近くなっただよな気がする。どうやら、俺は木陰にあるベンチに寝かせられていたようだ。不思議なことに意識はこれ以上ないくらいハッキリとしており、上半身も難なく起こすことが出来た。頭痛や目眩、その他諸々の症状も消えている。その代わりと言うべきか掌はやけに痛み、見ると擦り剥けた皮があつた場所から血が滲んでいた。手をついたのがコンクリートだったため不恰好なことになってはいるが、ゴミなどはない。誰かが洗ってくれたのだろうか。

「やっと目覚めたか、勇者よ。さあ、今こそ神剣パブロ、ディエーゴ、ホセ、フランシスコ・デ・パウラ、ホアン・ネポムセーノ、マリア・デ・ロス・レメディオス、クリスピーン、クリスピーアーノ、デ・ラ・サンティシマ・トリニダード、ルイス・イ・ピカソを手に取り、魔王ジンミン・セーンセンを倒す旅に向かうんだぜ！」

そんなことを言いつつ、俺に歩み寄ってきたのは気絶する寸前に会ったあの猫だった。尻尾を楽しげに揺らす姿は、一見すれば普通の猫そのものである。冷静になって　というよりは、一旦日本語を猫を無視して　改めて辺りを見回してみるが、ブランコやすべり台なんかの何処の公園にもあるアスレチックや古びたトイレがあるだけで人の姿は見えない。しかし、それでは可笑しい。俺はたしかに道路に倒れこんだのだ、猫一匹で俺をここまで運んでくることなど

「不可能、とでも言いたいのかい？　生憎だが兄ちゃん、それは偏見っつーもんやで。まっ、オレみたいなのウルトラスーパーファンタスティックな超凄腕ベテラン名猫探偵にかかれば不可能も可能にな

「つちまう云々は否定しねえけど」

冗談めかしてナルシスト染みた発言をする、というのは人間のお調子者に見られる行動であるがどうやら猫も同じようである。しかも、この猫にはどういう訳か探偵という職業まであるらしい。人間の言葉を話していることよりは驚きが少ない事実ではあるが、尾も分かれていない普通のキジトラ猫が自称とは言え優秀な探偵とは些か意外だ。

「おおっと、そりゃあ聞き捨てならない発言だぜ。人も猫もルックスが全て！　なんて単純明快かつ複雑怪奇な理論、虫食いがありすぎてシロアリすら寄ってこなさそうだ。現に、普通の猫（仮）なおれつちがアンタの頭痛目眩吐気その他モロヘイヤもとい諸々を解消させてやったわけだし。もつとも、その掌の傷みてえな物理的なもんは専門外だから勘弁な」

猫はそこまで話した後、「どっこいしょーりんじけんぽー」等と言いつつ腰というか尻を下ろした。この話が真実だとすると、俺は自分が知らない内にこの猫に多大なる恩を作っていたことになる。と言うにも、あの体調不良はつい先程起こったものではなく、数週間前から蓄積され始めたものだったのだ。医者に行ったところで原因は不明という怪談などのお約束も経験し、頼りになるかもしれない両親は福引きで旅行券を手に入れ夫婦水入らずで旅行中、最終手段のパソコンも現在修理に出していて、こうなったら図書館で書物を漁るしかないと善は急げ精神で向かったものも道路で行き倒れよく考えれば、この頃ろくなことがない。

「で、アンタこれからどうすんつもりよお？　ここで会ったのも何かの縁、殺人事件もしくは浮気調査なんかの人間達のキヤードロドロパラダイスは生理的に無理だけど、妖怪もしくは幽霊なんかの人

外達のヒュードロドロパラダイスなら任せんしゃいなオレに一つ賭けてみるっても一つの手ではあるぜ？ 別に『いや猫さんが勝手に首突っ込んできただけだし、自分は帰らせて頂きます。てか帰らせろ、この見事なブラウンマツカレルタビーがああああ！』な返答でも構わないけどさ。オレは化けて出たりしなければ、猫集会で陰口を叩いたりもしない善良なる一般市民だから、そこら辺は安心してもらっていいし」

牙が露になるくらい大きな欠伸をしながら、自称探偵は俺に尋ねてきた。相手がわざわざ強調して人外関係専門の探偵と名乗っているということは、やはり俺の身に起こっていることは普通の事でないのだろう。ならば、それに精通している人間、もとい猫に縋った方が利口ではある。だが、二つ返事で話に乗ってしまうわけにはいかない。この猫はあくまで『探偵』なのだから、仕事を頼むには何かしらの報酬が必要になってくるに違いない。

「ブブー、大正解。オレの場合、某幽霊族の末裔で元は墓場な二つ名だったのとは違ってボランティアじゃなくてビジネスでやってんからな。せつかく猫として生活送ってた。こんな暑苦しい中タダ働きするくらいなら、猫らしく昼寝を優先していきたいもんだぜ」

その理屈には納得するとして、早く肝心の報酬について話して欲しいところだが。

「わりいわりい。オレ、アンタみたいに有名RPGの主人公が如く黙っていらねえ性質の持ち主でさ。さらに正確に言うならば、鏡の国のヒナギクみてえにペチャクチャ喋ってる方が好みやな。鼻を摘まれるのも勘弁したいし。で、唐突な感じに肝心の報酬の話になんけど、今現在の支払い方法は食い物オンリーだぜ。どんな食い物

かは基本的にオレの気分と体調と好みと事情と偏見と気まぐれなんかで決めてるが、一応二ボシー本から引き受けてんな。ほら、野良猫やってる身にとっては好きなもんを好きな時に食べるって結構贅沢じゃん？」

長い尻尾を大きく振りつつ、猫は同意を求めるように言った。人間ではない猫だからこそその答えとも思えなくないが、さすがに事件の難易度などを考慮しないのはどうなんだろうか。

「よく考えてもみてくれよ。いくら『産地直送の超高級天然鰻を使った蒲焼です、この度のお礼として受け取って下さい！』なんて言われても、鰻よりも肉だ梅干だシユールストレミングだっ！ って気分の時だったら、ちよつと遠慮したいだろ？ つまり、そう言うことさ。まあ、どつちにせよ人間基準で無理なものは要求しねえから、そう神経質にならなくてもいいぜ」

たしかに俺が猫の立場だったとして、肉なんかのポリウムがあるものを食べたい時に超高級メロンが来ても喜ぶより先に少しガツカリするだろう。もつとも俺の場合は、あくまで少しだけガツカリするのであって嬉しいことには違いないのだが。

ほら説明もしてやったんだから早くどつちか決めてくれ、とばかりに顔を洗い出した猫を見ながら、俺は今回の件を取り敢えずは目前の探偵に依頼することに決めた。このままあれやこれやと悩む内に愛想をつかさかれ、結果的に成す術もなく死んでしまったという展開はごめんである。さらに言えば、ここまで色々と話したりしてくれただのに、それを無下にしてしまうのはどことなく気が引ける。

「ようやく腹を括ってくれたみてえだなあ。まっ、依頼されたからにはこのオレつちに頼ったことを孫の代まで最良だったと思わせてやるつもりだから、よろしくなんだぜ。さてと、探偵と依頼人つつ

「親密な仲になつたからにはお待ちかねの自己紹介タイムと行きまっか」

猫はせつせと動かしていた手を止める。言葉ぶりだけで評価するならば、この猫は受けた仕事には全力で向き合つ、俗に言う職人肌を持ち主らしい。そんな言葉を知つてか知らずか、猫は再び前足をピシッと揃えると思わせぶりな咳払い　　と言つても、ただ「ごほん」と言つただけだが　　をして、畏まつたように言葉を続けた。

「知らざあ言つて聞かせやしよう。浜の真砂と五右衛門が、歌に残せし盗人の　　みてえな前置きは堅苦しい上に面倒だからやめといで、オレは琥珀の琥に閻魔の閻で琥閻こえんつっーんだ。ここ、テストには出ねえけど大事だからよく覚えとけよ。……あつ、そうだそうだ。こつちが名乗つたからにはアンタも名乗つてくれよ？　モチのロンドンで、言葉に出してな」

「俺は亀鶴きかく　進太郎しんたろうだ」

「じゃつ、アンタのことはこれからは進ちゃんとも呼ばせてもらうぜ。オレつちのことも何とでも呼んでくれて構わねえから。それこそ、探偵だろつがだろつが水色眼スカイブルーアイズ・キジトラキャットの茶黒猫だろつがどーんと来い、なんつってな」

猫、もとい琥閻はそう言い切ると公園の入り口までのんびりと歩いていく。一体、何をするつもりなのだろうか。

「何つて、さつそく進ちゃんのお宅に訪問しに行くに決まつてんじやん。本当の熱中症で倒れられたらオレには手の施しようがないしい。詳しい話は歩きながら聞くから、な」

茶目つ気を前面に出してウインクしてみせる琥閻。些か図々しすぎるような気もするが今は両親も居ないし、言葉が通じる猫の一匹く

上手いようだ。俺はこの度の事の発端を思い返してみた。

あれは「俺も夏休みだし、もう高校生だから」と両親を説得し、久々の夫婦水入らずの旅行に送り出して二日経った夜だっただろうか。二階にある自室でクーラーを点けたまま寝ていた俺はふいに目を覚ました。ぼんやりと視線だけ動かして壁にかかった時計を見ると、針は三時ちよつと過ぎを指している。一応言っておくが、俺は早朝まで起きといて真昼間には寝ているような不健康な生活は送っていない。さつさと寝直そうとしたのだが、どういうわけか寝返りを打とうとしても体が全く動かなくなっていた。これが金縛りというものなのだろうか。初めての事に驚きつつも何とかしようと思戦苦闘していると、何かは分からないが小さな音が聞こえてきた。

「クーラーに関してはオレは『こんの軟弱者がああああ！』とか言う年寄り系キャラじゃねえから説教はしねえとして、そいつあ怖い話として考えるとなかなかのベタさ加減だな。で、その続きは？」

体験した自分が言うのも難だが、それからも怖い話でいう王道な展開だ。音はだんだん大きさを増していき、ある段階まで到達すると音から声が変わっていた。どんな感じの声かは上手く思い出せないが、『助けて』だとか『暗い、怖い、苦しい』だとか『ここから出して』だとかそんなことを言っていた気がする。その後いつのまにか俺は気を失っていたようで、再び目覚めた時にはカーテンから光が差し込んでいた。

「それ以来、何故か体調は日に日に悪くなっていくわ、毎晩そんな事が続くわでほとほと困り果てる　ってことでオーケー？　オレが事件報告で聞いたかつたんのは、ホラー番組とかで言う怪奇現象を進ちゃん目線で見た時の情景だからな。これ以上は喋んなくても別にいいってことを報告してみたって感じ。もつとも、進ちゃんもつと話をしたいっつーんなら、無料サービスの一環として聞い

琥閻は裏声での一人二役をやり終えると、フローリングの床の上を足音一つ立てず歩き始めた。たしかにその目線の先に俺の部屋があるから、さすが人外専門の探偵と言ったところだろうか。タオルを一先ず靴箱の上に畳んで置いておくと、俺もその後を歩いて追った。猫と人間の歩幅の違いは大きいのである。

「おつ、ここが進ちゃんのプライベートルームだな。なんか隠したいもんとかあるなら、数十分くらい外で待ってやってもいいぜえ？ 捜査の時もベッドの下に潜っちゃったりとかはしねえから、そこら辺は心配無用だし。探偵つーのは依頼人のプライバシーとか人権とかプライドとかを第一に考えなくちゃならねえかな。オレっちはどこかの誰かさんとは違って、体も頭脳もパーフェクトに大人なのさ！」

自室の真ん前に来て早々の一言であった。その心配りには好印象を抱くが、生憎俺の部屋に見られて恥ずかしいものはない。

「ぱりつぱりに思春期をエンジョイしてる年頃なのか？ 全く近頃の若いもんはこうだから って、昔はオレもそーいうスカしたようなガキだったから言えたもんじゃねえか。じゃっ、兎めいにも角つのにも遠慮なく入らせて頂けぜ」

よくテレビなどでドアノブに飛び掛って自分で扉を開けてしまう猫がいるが、この自称探偵は一味違うようだ。と言うにも、琥閻がそんなことを言いながら前足で扉を触った途端、何も触れていないのにドアノブが音を立てて回り、さらには扉までもが自分から動き出したのである。琥閻は人が裕に通れるほど開いた扉を見て満足そうに尻尾を振ると、こちらを振り向いた。

「どうだ、すげえだろ？ 探偵なるもの、無駄のない動作で、無駄のない捜査をし、無駄のない推理で事件を解決するべし！ ってな。あつ、それと猫が襖の開け閉めを出来るようになったら猫又になる兆候どーのこーのなんていう話もあるから、閉める作業は進ちゃんに任せんぜ。オレ、まだ尻尾を二本にする気はねえからさ」

楽しげに目を細め自慢するその姿に違和感を全く抱いていない俺は余程適応能力が優れているのか、それとも単に変わり者なだけなのか。机とベッドと本棚と……変わったものは何一つない平々凡々すぎる部屋を見回す琥閻を尻目に、程々に整理された机の上に置かれたエアコンのリモコン。何故か「エアコンディショナーのリモートコントロール」って言うと、なんとなくカッコいいよな！」と横槍が入ってきた。を手に取り、いつも通り冷房を入れた。

「ほう、この音は風鈴かいな。しかも、音色からしてそこのスーパーマーケットで売ってるような安物じゃねえと見た。ちなみにこの推理が間違っても、オレはどこぞやの神話のナゾナゾ好きみにたいに『恥ずかしい！ 死ぬ！』とか言い出すタチじゃねえから気遣いは無用なんだぜ！」

耳をピクピク動かしながら、琥閻は言った。たしかに窓際でエアコンの風を受けて鳴っているのは、美しい装飾のなされたガラス製の風鈴だった。これは母親が俺へのお土産として買ってきたもので、何でもその道の人が手作りした一品らしい。風鈴などに対して興味があるわけではなかったが、買ってきてくれたからには使わなくては悪いと思ひ現在の光景に至る。室内に飾るに留まっているのは、近頃は風鈴による騒音問題から近所トラブルに発展するケースがあると聞いたからであり、決して恥ずかしいだとかそう言う理由ではない。琥閻はしばらく風鈴の音を静かになつて聞いていたが、やがて尻尾を大きく振る。

「進ちゃんや。全ての謎はこの一世紀に一人居るか居ないかの天才、史上最高の探偵琥閻様の名の元に今解決したぜ！ さて、後は犯人の居場所をオレっちが『狙った犯人は逃がさないことに定評があるアルティメットキヤット』アルティメットキヤットという二つ名で呼ばれる由縁である空前絶後で前代未聞で奇々怪々な能力でサクサクつと特定するだけだな。ついでに言えば、オレには今教えたカツコいい二つ名があると思ってたけど、実はそんなことなかったぜ！」

急展開すぎて着いていけない俺に、詳しく推理を聞かせてもらいたいのだが。

「おっと、そう言やあ自分の推理を大っぴらに話すのも探偵の仕事だったつけ。フィクションな探偵方と違ってカツコつけた真似が苦手なもんで、すっかり忘れてたぜ。……まっ、最初に結論を簡潔に言っておくと今回の事件は『偶然の一致による音信事故』っつーところだな」

「事故？」

「YES！ 誰がなんと言おうと、今回は事故決定だぜ。なんて、進ちゃんを苦しめた声の主は本当に助けを求めてただけなんだからな。決して『冥土の土産もとい自分への慰めに顔も知らない他人のお前もレッツゴートゥアノヨー』なわけじゃねえ」

怪訝そうに尋ねる俺に琥閻は返答だけすると、突然ベッドから机に机からカーテンレールに飛び移った。まさに目にも止まらぬ早業と言ったところだろうか。いきなり猫の野生的な一面を見せてきた琥閻は風鈴が吊るしてある場所まで悠々と歩いていくと、こつ話を続けた。

「じゃっ、さっそく今回の事件の種明かし（仮）と行くぜ。一回し

か言わねえつもりだから、よおく聞いといてくれよ？ 声が空気の振動で聞こえてるってことは進ちゃんも知ってると思うが、実は人間とは違う奴らの声もそれとソックリな原理を持つてるわけよ。ただ、震わすのが空気と違う概念　よし、ここでは分かりやすく仮に『鬼が羽毛で苦しむような概念』略して鬼羽苦きよくと呼ぼう　なだけでな。普通の人間に幽霊なんかの人外の声が聞こえないのは、鬼羽苦の振動を感知できる能力がないからってこと。同時に言えば、人間が人外の声を認識できる状況は限られてくるってわけさ」

そこまで言つと琥閻はこちらをただただ見つめてきた。この流れから察するに、その状況としてはどんなパターンがあるか問い掛けてきているのだろう。前提が一般人からしたらトンデモ理論なだけあって、難しいにも程がある問いだが……その鬼羽苦とやらの振動を空気の振動に変換した場合、とかだろうか？

「まさかの花丸を付けたくなるくらいの大正解だとお……！？　さすがここまで三回しか言葉を発してない男だぜえ……！　って言うのは置いといて、今回の声の原因はまさにそれがここで起こつちまつたからなのさ。正確に言えば、人外である相手の声の振動数と土産物の風鈴の振動数が天文的確立でマッチング、かつ相手の誰かに自分の助けを聞いて欲しいという思いが強すぎたりその他諸々の要因が重なった結果、鬼羽苦の振動が空気の振動に変化して進ちゃんの耳に届いたって寸法さ」

今までの話を自分なりに纏めてみると、『誰でもいいから助けて欲しい』という強い願いが風鈴を通して偶然にも俺に届いた、ということになるのだろうか。

「おっ、進ちゃん意外と鋭い上に物分かりがいい『物分どい』って奴だったんだな。ちなみに悩みの種だった頭痛とか目眩とかその他

諸々な症状は、相手側の不安や恐怖なんかの負の感情ってやつが振動を通して伝わってきちゃったのが原因だろうぜ。健気に母親が買ってきてくれた風鈴を飾ったりしてるところからして、進ちゃんって相手の思いをしつかりと受け取る夕ちっぽいかな。負の感情を無意識の内に受け止めちゃった、っつーところか」

琥閻はカーテンレールの上にも関わらず、後ろ足で耳の裏を掻きながら推理というか説明を締めくくった。言われてみると、たしかにそんな気もしないでもない。

「さてと、推理も披露してみせたとところで声の発信源でも特定すっかな。中国ではその名の漢字はペリカンを表す暗色の羽毛を持ちし鳥と、モンゴルや中央アジアの遊牧民の間ではその名が力ある者の象徴として人名に用いられる比較的小さい鳥よ！ 今汝らの名の力を使うことを許したまえ！ 『有うの目高たかの目』！」

魔法の呪文か何かのように厳かに豆知識を言つてのけると、琥閻は風鈴に向かって前足を勢いよく振り下ろした。と言っても、その振動で風鈴が揺れたりはしなかったから、多分当たる寸前で力を弱めたりしたのだろう。

「ちなみに今のは自分が探してるものの位置がある程度分かる能力な。有ると高だからある程度、っつー洒落ってやつちゃ。モチの口ンゴミアントで、詠唱とかはあってもなくても関係ねえぜ。あくまでモチベーション的な問題ってなだけで」

「風鈴に触った理由は？」

「特にはないな。しいて言うなら、あれは『有の目高の目』って能力の指名をした後、オレが探してるものと関連がある何かを触ることとでなんやかんやな非科学的变化が起こることとでようやく発動するからじゃね？ ちなみに矛と盾的なツッコミなら受け付けるぜ！」

日差しは当たらず、いつも歩いているコンクリートの上よりは涼しく感じる。昔からある山道は整備が行き届いてるとは言えず、道の真ん中で堂々と存在を示している雑草や腐り落ちた看板などが目に付いた。それでもポツポツと菓子の包装や空のペットボトルと言ったゴミが落ちているのは、一重にあの噂のせいだろうか。

「あつ、それならオレも知ってるぜ。なんたつて、ここら一带を表する超一流エリート探偵だかな。噂話なんていうトーシロから見ちゃ実用性がない情報も、しっかりと把握済みよう。たしか、『ここには昔　があつたそう』なんて言つと『イマモ！』つて声と共にその　が具現化する　つと、これは別の妖怪やないかいー！」

一人ノリツツコミという、ある意味難易度が高いことをやってる琥閻を他所に俺はその内容を思い返す。たしか、この山の中腹辺りまで行くと何処からともなく『帰れ』などと言う声が聞こえ、気がついたら山の麓まで降りているのだとか。今までは夏恒例のただの怖い噂だと思っていたのだが、人外専門の探偵がそれを知っているということとは

「やっぱり、進ちゃんには『物分かどい』つーオレっち特製な力バン語がよく合うな。まっ、だからこそ、風鈴を持つてくるように言つたオレも中々のもんだけだな。それにさ、よく耳を澄ましてみるよ。……さっきまで大音量で鳴ってたバックグラウンドミュージックがなくなってるだろ？」

琥閻はピタリと足を止めると、言った。言われてみれば、さっきまではたしかに鳴っていた蝉の声が一切聞こえない。足音と話し声が消えれば、そこに残るのは沈黙のみだった。明らかに普通ではない、何かが出そうな雰囲気である。そんな中で、俺は視界が徐々に悪く

なっ行って行っているのに気付いた。真夏の真昼間にも関わらず、辺りに霧が立ちこみ始めたのだ。最終的には近くに居るはずの琥閻の姿さえ、霧に阻まれ見えなくなってしまった。

『人間どもよ、即刻この場から立ち去るがいい』

「だが断る！ なーんてオレが言っちまったら、アンタどうするつもりよお？ 実際に言っつもりだっという事実は一旦置いてくとして」

霧の中で、やけに重々しく響く声に琥閻は相変わらずな呑気な口調で答えた。人外専門の探偵だけにこう言った状況になれているのか、それとも単に肝が座ってるだけなのかは分からない。もっとも俺に何かが出来るわけでもないから、ここは探偵の本領発揮を願うしかないのだが。

『……お前らのような人間の都合など知らぬ。即刻立ち去ってもらおうか』

「だが断る2ndってな。まっ、助けを求めている奴を無駄に待たせておくつーのも紳土的じゃねえし、悪いがちよちよいのちよいで終わらせてもらっぜよ。『Equus caballus』や『桜だとか呼ばれる存在だと思ったら、実はそうじゃなかったんだぜ！ 兎にも角にも行くぞ！ 』場客を現す』！」

そんな言葉が聞こえるや否や、白いカーテンと言っても過言ではなさそうだった濃霧は瞬く間に姿を消し、代わりに一匹の標準のものより遥かに大きな猪が現れた。頭が辺りの木の枝と同じ高さにある、と言えばその巨体っぷりを分かってもらえと思う。毛は雪のように白く、牙は成人男性の腕よりも太そうである。考えるまでもなく、霧の発生源はこの猪だったのだろう。

だが、目前に居るのはあくまでその猪のみである。ようするに、琥

闇の姿がどこにも見えなかったのだ。

「我が術をこつとも容易く破るとは……一体、何者だ！ 姿を現すがよい！」

「ちよつ、待てよお。先に隠れてみせたのはソツチなんだから、コツチにもかくれんぼをやらせてくれたつていいだろ。というか、そうじゃなきゃ現代社会的な平等主義から大きく外れることになんしつてなわけで」

大きな頭を振り回し、威嚇するような口調で言つてみせた猪。琥閻の姿は、その真上の位置にあつた。どうやら、タイミングを見計らつて枝の上から飛び降りたようである。猪は影ですぐに気付き顔をそちらに向けたものも、あの巨体を咄嗟に動かし追撃することは出来なかつた。

「『寝子だまし』！」

琥閻が猪の顔の真ん前で手を打ち合わせるとほぼ同時に猪は動きを止め、やがてゆっくりと地面に体を投げ出した。

- - -
- - -
- - -

「すまんおう。わしとしたことが、主を守ろうとするあまりカツとなつてしまった」

「まあまあ、そう気にしなくても良いつてことで。猪突猛進じゃねえ猪つーのも、なんかアレだしさ。それにこつちも時間短縮の為とは言え、問答無用で山神の使いであるアンタを不意打ちで眠らせちまつたし」

「つまりはお互い様というやつですか」

「ブツハツハツハツハ！」だの「ニヤハハハハ！」だのと大きな笑い声を交わしつつ、二匹は俺の目前を仲睦ましく歩いていた。順を追って説明すると、あの猪の正体はこの山に祭られている存在の使いであつて、とある事故に巻き込まれた主人　琥閻によれば、俺の元に助けを求めてきた声の主と同一人物　を守る為に人間を術で追い返していたそうだ。噂程度にしか存在が知られなかったのもその術の力の為だというから、人外の中でもかなりの実力者に当たりそうである。もつとも、現在の光景から推測するに時折さつきの如く突つ走つてしまうことはあれど、本来は穏やかな気質の持ち主

「おつ、進ちゃんについてスキル観察眼がついたか」と言われた　のようだ。ついでに言えば、先程の『寝子だまし』というの　は本猫曰く「あれは手に纏わせた非科学的な力を打ち合わせたことにより生み出された衝撃波で相手を眠らせるという原理の元で成り立つてて、この頃お疲れな奴には特に効果があるんだぜ！」らしい。

「で、ここが例の場所か。こりゃあ、たしかに大変なことになつてんな。どんくらい大変かつて言つと『明日、日本大陸はこの世から消滅します！』とか突然言われるレベルう？」

二匹がピタリと足を止めたその先には、土砂崩れの爪痕が残されていた。崩れ落ちた土にあまり植物が生えていないことからして、この状態になつてあまり時間は経っていないようだ。

「実は少し前の暴風雨で地崩れが起き、社が土の中に埋もれてしまつたのじゃ。前々から社は放つておかれて荒れ放題、その上でこんなことが起こつてしまつては、力が弱まつたわしと主人ではどうにも出来んかつたのだ」

「なるなる。まっ、ここまで首突つ込んでおいて途中で引き下がる

なんてカツコ悪すぎてワライカワセミとかワライフクロウにすら失笑されそうだし、あとはこのオレっちに任せときな！　こんなオレの体の三桁倍はありそうなちっぽけな山、一瞬で消し去ってやるぜい！」

琥閻は自信満々と言った感じで、ゆつくりと歩いていく。そして、土砂の前で数回深呼吸　　と言っても、「吸って吐いて、吸って吐いて、吐いて吐いて吸う！」などと言っていたただけだが　　をする

と、
「強い者、豪傑の代名詞としてよく用いられる獣よ！　今こそ、莊嚴なる声で唸り吠え叫びて神風が如き力を巻き起こすがいい！　唸れ、オレの拳！　『琥衝風裂』！」

土に前足を下ろした。まるで地面をただ踏んだだけのようなその様子からは、到底力を入れているようには見えない。しかし、次の瞬間。前足の下から亀裂が走ったと思ったら、崩れた土がまるで大きな固体か何かのように一粒の砂も崩さず左右に割れた。さらに、その切れ間の間からは古い社が出て来たではないか。これには頼んだ猪も驚いているようで、二本の大きな牙が目立つ口をポカンと開けていた。

「さつとと。元の位置に戻してまた社の上に崩れて治しての繰り返しじゃあ、奇抜性も新鮮味も面白度もありやしねえかな。崩れても仕方ないで許せる場所に土を塗り重ねておいて……完成、つと。なんと言うことでしょう、厚い土の層に閉じ込められた社が探偵流劇的ビフォーアフターで以前のような姿を取り戻したではありませんか！　　って、感じだな」

トラック何十台分はありそうな土の後始末をすると、琥閻は疲労感

を全く感じさせない口調で言った。しばらくして、猪も驚きで硬直しきった状態からなんとか立ち直ったようで、

「しかし、まさかこんなにあっさりと問題を解決してしまうとは…
…余程のお方と心得ますがのう?」

「なに、オレはただのしがない探偵にすぎないでつき。取り敢えず、今回の教訓はよく喋る猫だって仕事のカリスマなことはある、ってことだな。まっ、能ある鷹は爪を隠すのに対しイエネコ系統はどんな奴でも爪隠せるから、それも当たり前っちゃあ当たり前」

「白ー！ 白猪しろいのー！」

今までの如く喋りたてようとした琥閻を遮ったのは、あどけない感じを残した声だった。見ると、社の前に着物に黒いおかつぱ髪をした小学校低学年くらいの女の子が立っている。こちら、というか猪の方に向かって大きく手を振っていることからして、間違いなく俺の元に聞こえてきた声の主だろう。

「『 様！ よくぞ、』無事で！」

「白、会いたかった！」

大猪と小さな女の子がお互い歩みあい再会を喜び合ってるその様は異質ではあるうが、それだけの言葉で済ますにはあまりに不躰な何かが感じられた。猪が口にした少女の名前が聞き取れなかったのは「実は人外によつては名前自体に力が込められてる特別な場合があつてだな。そう言うのは色々な理屈的に人間には聞こえねえ仕様になつてんのさ」ということらしい。

「そう言えば、あのお方がたは一体?」

「人間の方は進太郎殿と言つて」 『 様』 様の声を聞き届けてここまで足を運んで下さり、もう一方の琥閻殿は社を埋めた土を退かして

くれた次第で」

「そうだったのですか！ すいません、多大なる恩を受けた身にも関わらず、感謝の意を示すのが遅れてしまいました……」

ようやく喜びによる興奮が冷めたらしい女の子は、それを聞くと慌てて俺と琥閻の前に出て頭を下げた。幼い容姿をしているにしては、礼儀は下手な大人よりちゃんとしてるようである。

「まあまあ、嬢ちゃんがそんな恐縮する必要はねえさ。オレたちはただアంతの声を聞いて、勝手に助けにきて勝手に行動を起こして勝手に今に至ってるわけだしな。当然さ、日本男児としてはね、って言ったところっつーか。なっ、進ちゃん？」

「たしかにそうだな」

同意を求められそう答えたものも、声が無処から来たのか特定出来たのも、神経質になった猪を傷一つ負わすことなく静められたのも、果ては社の土を綺麗に退かすことが出来たのも、琥閻が居たからこそであって俺は何もしていない。それなのに、こんな偉そうなことを言っているものだろうか。

「現代っこの進ちゃんだから特別にSFチックな例えをすると、どんなに超高性能なロボットも起動してくれる人が居なきゃ、結局はただの鉄くずに過ぎないんだぜ？ 物事には絶対きつかけとなる何かが必要なんだよ。それに進ちゃんはなつた訳だから、もっと胸張って自慢するがいいぜ！」

「？」

「なに、こつちの話さ。そう言や嬢ちゃん、結構長いこと太陽にあたらないうちに居たみてえだけど、何か不調とかあるかい？ オレに出来る範囲なら力貸してやるからさ」

「おいおいおいおい！ そんなことも分からなかったのかい？ ……
…って言うのは、テストに一学年上の問題を出すようなもんだから
やめておくとしてだ。ほら、あの猪は不思議な術が使えただろ？
実は風鈴には元々は魔よけとしての意味があつてだな、オレが『有
の目高の目』をかけた時についてにその要素にちよつとした細工を
しといたわけよ。だから、進ちゃんは霧の中に居ても視界が悪くな
るだけだったのさ。実はあれ、普通の人間が入り込んじゃうと一種
の催眠状態になつちまうんだぜ？」

俺はどうやら知らぬ間に再び琥閻に助けられたようである。もつと
も、厄介な相手と鉢合わせることになる可能性があると最初から知
っていたのなら、術を風鈴にかける時にその辺りの説明もしておい
て欲しかったものだ。まあ、この性格では仕方ない、と思つている
自分が居るのも事実ではあるが。

「さつとと、進ちゃんの家に着いたみてえだし、オレはここでさよ
うならだな。また人外関係で問題が起こつたら、あの公園に来て心
の中でオレのことを呼んでみるこつた。他の依頼で出かけてる時以
外なら、ご贖にしてくれたっていう意味で暖かくwelcome
つてやんからさ」

スタスタと俺の家の前を素通りしていく琥閻。しかし、まだ報酬を
払っていないような気がするのだが。

「あつ、報酬のことだけだな。さつき家に上がった時にテキストに
台所からポテチのうす塩もらつてきたから、問題の方はナツシング
だぜ！ いや、野良猫やつてんと塩気があるもん食いたくなつてな
じゃあ、またな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6105n/>

キジトラ探偵『琥閻』 夏バテにはご用心！

2010年10月11日02時12分発行